様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３４４６

研究課題名（和文）再帰構文における他動性と動作主性に関する対照研究

研究課題名（英文）A Contrastive Study of Japanese and English Reflexive Constructions: With Special Reference to the Transitivity and Agentivity

研究代表者
小薬　哲哉（Kogusuri, Tetsuya）

大阪大学・言語文化研究科（言語文化専攻）・准教授

研究者番号：４０７３６４９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「太郎が自分を褒めた」のような再帰構文および類似の特徴をもつ関連構文が、受動文として成立するための語彙・統語・意味的要因を明らかにした。再帰構文は本来的に受動文が容認されない（例: 太郎が自分に褒められた）が、それが可能となる事例（例: 太郎は自分に責められている）を考察し、その条件を明らかにした。さらに、「再帰構文の受動化」という受動文のカテゴリー全体からすれば、「周辺的」と言える事例を考察することで、これまで注目されてこなかった日英語の（直接）受動文それ自体の新たな特性をも明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は日本語および英語の再帰構文の受動化の条件を明らかにしただけでなく、関連する諸構文の受動化の条件をも明らかにし、日英の文法研究における記述的貢献を果たしたと言える。また、日本語「自分」に関する述語制約の考察から日本語の再帰態というヴォイスカテゴリーの研究に新たな視点をもたらすとともに、これまで等閑視されてきた日本語再帰代名詞の副詞的強意用法の特異性や体系性を考察することによって、学術的に重要な研究対象を掘り起こすことにつながった。さらに、本研究の記述的成果は、日本語教育に新たな知見をもたらすという点で今後の貢献が期待できるものである。

研究成果の概要（英文）：This study has investigated lexical, syntactic and semantico-pragmatic factors passivizing the reflexive construction (e.g. Taro praised himself) and its associated constructions. Although the reflexive construction is inherently unable to be passivized (e.g. *Taro was praised by himself), this study considered some exceptionally acceptable cases of it (e.g. Taro-wa zibun-ni seme-rare-teiru. 'Taro is being blamed by what he did in the past.') to elucidate its licensing conditions. Furthermore, I have shown the core features of the passive voice that have not been found by conducting researches into many "peripheral" cases regarding reflexives.

研究分野：認知言語学、語彙意味論、構文文法、並列構造理論

キーワード：再帰構文　受動化　直接・間接再帰　副詞的強調用法　副詞的強調用法　動作表現構文　同族目的語構文

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究の背景は、本来的に自動詞とされる動詞に名詞句が後続する、(1a)「動作表現構文（gesture expression construction）と (2a)「同族目的語構文（cognate object construction）」といった周辺的他動詞構文の他動性研究に端を発する。先行研究では、動詞後位置にくる her thanks、a weary sigh といった名詞句は yesterday のような副詞的付加詞であり、従って*Yesterday was came by John.が許されないのと同じ理由で受動化できないとされた (Huddleston and Pullum 2002, Jones 1988 等)。

(1)　a.　Pauline smiled her thanks. (Levin&Rapoport 1988)
　　b. * Grateful thanks were smiled by Rilla. (Massam 1990)
(2)　a.　Bill sighed a weary sigh. (Jones 1988)
　　b. * A weary sigh was sighed by Bill. (Jones 1988)

しかしながら、特定の文脈上の条件が整えば、これらの構文であっても (3) のように受動化される例が観察される。

(3)　a.　Warm thanks were smiled at the audience. (Felser and Wanner 2001:108)
　　b.　A weary sigh was sighed by the overworked field worker at the end of a long day. (ibid.)

そこで Kogusuri (2011, 2012) では、これらの名詞句は付加詞ではなく、構文の項 (constructional argument)、すなわち構文が認可する目的語であると分析した。一方、(2) で受動化が容認されないのは、(1)の両構文の動作主主語と対象目的語が、分離不可能所有関係にあるため（あるいはそれに基づく空の束縛変項の生起が原因）だと分析した。例えば、(1a) の her thanks は、動作主 Pauline に帰属する感情・態度であり、個別のモノとして他者に譲渡したりできない。(1b) も同様である。この意味関係が受動文に求められる意味に合致しないため容認できないと考えた。

分離不可能所有関係が関わる他動詞文には、他に「太郎は手を振った / John waved his hand」のような身体部位名詞を目的語にとる再帰構文（身体部位再帰構文）がある。この構文もまた、先行研究で受動化が容認されないとされる (仁田 1982, Levin 1993 など) が、コーパス上で実例が観察され、(3) への分析を応用して説明できると考えていた。しかし、研究を進めるに従い、(3) への分析を単純に適用するだけでは説明しきれないことが明らかになってきた。また、身体部位名詞以外に、再帰代名詞「自分 / oneself」が関与する直接・間接再帰構文もあり、その受動化はまた別の要因が関与することが判明した。

２．研究の目的

本研究では、**日英語の再帰構文を周辺的他動詞構文の一つとして位置づけ、その受動化の成立条件を明らかにすることで当該構文の他動性を考察すること**を目的とした。特に、Kemmer (1993) の研究に基づいて、日英語の再帰構文を次の表のように、(i) 身体部位再帰構文、(ii) 直接再帰構文、(iii) 間接再帰構文の三種類に下位分類し、相互の関係を念頭に置きながら受動文が成立する条件を記述的に一般化した。

	(i) 身体部位再帰構文 (body-part reflexive construction)	(ii) 直接再帰構文 (direct reflexive construction)	(iii) 間接再帰構文 (indirect reflexive construction)
日本語	太郎は手を振った	次郎は自分を責めた	三郎は自分にコートを買った
英語	John waved his hand.	Bill blamed himself.	Ken bought a coat for himself.

表 1

これらの再帰構文は、いずれも先行研究で受動化が容認されないとされてきた構文であった。しかし、次の実例が示すように、実際には受動文として使用されている例が散見される。

(4)　a.　手が振られ振り返される
　　b.　かれは自分[=自分の心の声]に責められていた
　　c.　このコートは、優子自身によって自分のために買われた。
(5)　a.　Arms were waved ...
　　b.　Man is made and unmade by himself.
　　c.　the winning ticket ... was bought for himself.

(4) や (5)　の例が容認可能となるメカニズムを解明することを目的とし、研究を行った。また、研究の発端である (3) のような、**動作表現構文や同族目的語構文といった関連構文の受動化に関しても、より詳細に考察を深められる**見込みがでてきたため、**より理論的な見地から研究を進**

展させる という目的も研究の過程で生じた。
　さらに、再帰構文の文法的振舞いを説明するためには、「自分」や oneself の統語・意味的特性をより明確に規定する必要が生じた。この目的から派生的に生じたテーマが、再帰代名詞の副詞的強意用法（adverbial emphatic reflexives）に関する研究であり、特に「自分」や「自ら」のような日本語の様々な再帰代名詞が副詞的に振舞う際の文法的特質を明らかにする という目的も設定した。

３．研究の方法
　母語話者の内省判断、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)や Corpus of Contemporary American English (COCA) などの大規模コーパスからの収集データ、およびそれを補完するウェブ、小説、新聞、雑誌などからの用例収集によって、質的および計量的観点から検討を行った。

４．研究成果
　再帰構文とその関連構文の研究、およびそこから派生した再帰代名詞の関連現象の研究として、以下のケーススタディを行い、成果を上げることができた。
（1）日本語の「自分」に関する述語制約：日本語の「自分」が生起する再帰構文には、上述の通り、「自分」が直接目的語となる直接再帰構文と間接目的語となる間接再帰構文が存在する。日本語再帰構文のうち再帰代名詞「自分」が生起する直接再帰構文・間接再帰構文がどのような条件で可能となるのかについて意味論的観点から考察を行った。従来、物理的働きかけを伴う行為を述語が表す場合、「自分」が目的語になれないとされてきた（例: Akatsuka 1972 など）。しかし、実際には「ナイフで自分を刺す」のように一部の例外も存在している。本研究ではこうした物理的働きかけを表しながら直接・間接目的語として「自分」が容認される条件を考察した。
　本研究では、まず「自分に」が生起する間接再帰構文の実態を記述的に明らかにし、従来主張されているよりも多様な意味タイプの述語動詞が生起することを示した。また、その意味的成立条件に基づいて、直接再帰構文における「自分を」の生起可能性を説明する分析を提案した。さらに、「自分」が項として生起する再帰構文の受動化の可能性も考察し、「自分」の指示対象が先行詞である名詞句と「独立した実体」と見なさなければならないこと、「独立している」と見なされるためには「過去の自分」のような個体の異なる時空間的側面を指す、あるいは「別人格の自分」のように異なる意識主体を表す場合があることを明らかにした。研究開始当初は、受動文の認可条件の解明のみを念頭に置いていたが、述語の意味制約まで考察が及んだことは、予想外の成果であった。

（2）再帰構文と関連した特徴をもつ構文の考察
[2-A] 関連構文（動作表現構文・同族目的語構文）の受動化の条件：再帰構文との関連で、一部類似した構文的特徴を持つ動作表現構文 (例: Mary smiled her thanks.) と同族目的語構文(例: Emily smiled a beautiful smile.) の受動化に関する研究も論文として投稿し、2020 年刊行の書籍(分担執筆) に掲載された。この研究では、動作表現構文と同族目的語構文の目的語の意味特性と構文全体の意味特性がどのように組み合わさるかを考察した上で、目的語の意味特性が受動化のような構文の文法的な振舞いにどのような影響を及ぼしているかを検討した。再帰構文とは異なり、目的語が複雑な事象を表す派生名詞であることから、これまでよりも詳細な意味分析が必要であること、および Pustejovsky (1995) が提案する生成語彙意味論 (Generative Lexicon) の枠組みでの説明が、当該現象の原理的説明にとって有効であることを示した。
[2-B] V 方ヲスル構文と叙述の類型に関する研究：2-A のケーススタディからさらに派生した研究として、動詞派生名詞「V 方」を目的語とする「V 方ヲスル」構文の実態を考察した。「彼は面白い走り方をしている」「東京はこれまでにない雨の降り方をしている」のような文の解釈は、「V 方」と軽動詞スルのそれぞれの意味特性が複雑に絡み合っており、その結果、特異な項の具現パターンを示すなど、様々な興味深い事実が分かった。また、当該構文の解釈上の特性を、近年注目されている「叙述類型論」の観点から議論した。

（3）日本語再帰代名詞の副詞的用法の記述的・理論的研究：日本語再帰代名詞「自分」や「自ら」の副詞的用法の記述的・理論的研究を行った。これは、再帰代名詞「自分」と共起する述語の意味制約に関する研究から派生したものである。
[3-A]「自分から」：副詞的な振舞いを示す「自分から」の用例を、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) から網羅的に抽出、その用法の意味論的分類を行うことで、本来の代名詞的用法との異なりを記述的に明らかにした。「自分から」の副詞的用法には、「彼女は自分から発言した」のような行為の動作主性を強調する用法と「太郎は彼女に話しかけられる前に自分から話しかけた」のような行為の先行性を強調する用法が存在することを明らかにし、この区別が形態論的にも裏付けられることを示した。
[3-B]「自分で」：「自分から」の副詞用法を再整理した上で、「自分で」の副詞用法に関する記述的研究を行った。現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)から網羅的に用例を抽出し、その用法を考察、意味論的分類を行い、それを論文にまとめて発表した。結果、「自分から」「自分で」の共通点として、副詞的機能をもった用法が複数存在すること、各用法間で特殊性をもち、特に形態論的・意味論的合成性の度合いが異なっていること、その意味機能は助詞「から」「で」の

本来の機能を一部受け継いでいる（継承している）ことが明らかとなった。これらの記述的発見を説明するための理論的枠組として、近年構文理論において注目を集め始めている構文形態論の枠組みで分析を行った。以上の研究成果を、2019 年 8 月に行われた国際認知言語学会を中心に、複数の学会・研究会で発表した。
[3-C]「自ら」：日本語再帰代名詞「自ら」の用法の考察を行った。「自分から」の副詞的用法、「自分で」の副詞的用法に引き続き、「自ら」がどのような用法を確立させているのか、現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) から網羅的に用例を抽出し、 その用法を考察、意味論的分類を行い、それを論文にまとめて発表した。「自ら」は「自分で」と近似した副詞的用法をもつ一方で厳密には置換可能ではないこと、および、名詞的修飾用法という形態統語的に異なる特徴も持ち合わせており、類似の用法を持つ「自身」よりも限定された狭い意味を表すことを明らかにした。

（4）無生物主語を先行詞とする「自分」の心理言語学的研究：同じ再帰代名詞を研究テーマとしている国外の研究者とともに、日本語再帰代名詞の共同研究プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトでは、従来の研究では容認不可能とされた、無生物の先行詞をとる「自分」を考察対象とし、どのような条件で「自分」が容認されるかを考察した。具体的には、自己ペース読文課題による心理言語学的実験を行ってその条件を分析した。成果は口頭発表として現在投稿中であるが、これまで明らかにされてこなかった再帰代名詞「自分」の新たな側面に光を当てる研究として、今後の進展は従来の再帰代名詞研究に記述的・理論的貢献をもたらすことが期待される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Tetsuya Kogusuri	４．巻 4
２．論文標題 On the Emphatic Reflexive in Japanese: With Special Reference to Zibun-de	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2018―認知・機能言語学研究IV	６．最初と最後の頁 31-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小薬哲哉	４．巻 3
２．論文標題 付加詞用法の「自分」の予備的考察―「自分から」を例に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2017―認知・機能言語学研究III	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小薬哲哉	４．巻 1
２．論文標題 非飽和名詞の意味論と受動化	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本英文学会第90回大会Proceedings: The 90th General Meeting of The English Literary Society of Japan	６．最初と最後の頁 267-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小薬哲哉	４．巻 5
２．論文標題 「自ら」の2つの強意用法とその形式的・意味的特徴について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2019―認知・機能言語学研究V	６．最初と最後の頁 21-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 小薬哲哉	４．巻 6
２．論文標題 V方ヲスル構文の解釈と二種類の動詞スルー叙述の類型の観点から	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2020―認知・機能言語学研究VI	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 小薬哲哉
２．発表標題 「自分から」「自分で」の強意用法に関するフレーム・構文論的分析
３．学会等名 洛中ことば倶楽部
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tetsuya Kogusuri
２．発表標題 Emphatic Reflexives in Japanese: A Frame-Constructional Approach
３．学会等名 International Cognitive Linguistic Society 15（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 小薬哲哉
２．発表標題 「自分から」の副詞的強意用法ー構文形態論的アプローチ
３．学会等名 第7回筑波英語学若手研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 小薬哲哉
２．発表標題 付加詞用法の「自分」の予備的考察―「自分から」を例に―
３．学会等名 洛中ことば倶楽部
４．発表年 2018年

１．発表者名 小薬哲哉
２．発表標題 日本語の再帰と受動―動作主性の観点から
３．学会等名 筑波大学英語学研究室 加賀信広教授還暦記念言語学特別ワークショップ（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 小薬哲哉
２．発表標題 非飽和名詞の意味論と受動化
３．学会等名 日本英文学会関西支部第12回大会シンポジウム「語彙・構文の文法現象における名詞の役割」
４．発表年 2017年

１．発表者名 小薬哲哉
２．発表標題 「自分」の再帰用法と述語の意味制約
３．学会等名 日本言語学会第155回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計1件

１．著者名 由本陽子・岸本秀樹編、杉岡洋子・伊藤たかね・由本陽子・眞野美穂・小野尚之・志田祥子・中谷健太郎・鈴木彩香・竹沢幸一・小川芳樹・新国佳祐・和田裕一・工藤和也・小薬哲哉・前川貴史・于一楽・江口清子・岸本秀樹	４．発行年 2020年
２．出版社 開拓社	５．総ページ数 316
３．書名 名詞をめぐる諸問題―語形成・意味・構文―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
その他の国・地域	National Central University, Taiwan			